

Center for Excellence in School Education,
Graduate School of Education, The University of Tokyo
Working Paper Series in Young Scholar Training Program

Characteristics of Multiple-University

Enrollment in Cambodia:

A case study in two universities

Shoma Aota

The University of Tokyo

September, 2016

No. 12

東京大学大学院教育学研究科附属 学校教育高度化センター

Center for Excellence in School Education
Graduate School of Education
The University of Tokyo

カンボジアにおける二重学籍の特徴

—2つの総合大学を事例として—

青田 庄真（東京大学）

Characteristics of Multiple-University Enrollment in Cambodia:
A case study in two universities

Shoma Aota
The University of Tokyo

Authors' Note

Shoma Aota is a PhD Student, Graduate School of Education, The University of Tokyo.

This research was supported by a grant, Youth Scholar Program from Center for Excellence in School Education, Graduate School of Education, The University of Tokyo.

Abstract

It is known that many university students in Cambodia are simultaneously enrolled in two or more bachelor's degree programs. Characteristics of the students enrolled in multiple universities (MUE) were investigated and associations between these characteristics and career interests of the students were discussed in this study. In the past two decades, Cambodia has witnessed high economic development and the establishment of a number of private universities that have multiplied their enrollments. Studies have indicated that a notable number of students are enrolled in multiple universities. The current study was designed to obtain new information about this trend, by taking differences in the backgrounds of MUE students into consideration, and by using interviews and questionnaires, in contrast to previous studies that were mainly based on informal interviews. Results indicated (1) MUE students tend to emphasize the choice of faculties than of universities; (2) many MUE students do so because of their family wishes; and (3) MUE students' awareness of finding employment is low. Based on these findings, it is concluded that increasing enrolments through MUE is not conducive to improving the quality of university education in Cambodia.

Keywords: Cambodia, Higher education, Career interest, and Multiple-university enrollment

カンボジアにおける二重学籍の特徴

—2つの総合大学を事例として—

1. はじめに

カンボジアをはじめとする東南アジア諸国においては、順調な経済成長の一方で、離職や失業がしばしば問題視されている。特に、高等教育が急速な量的拡大を見せているなか、高等教育修了者の失業が深刻な問題として取り上げられている (e.g., 小口, 2012)。そんな中、カンボジアにおいては大学生がより良い職を得るための手段として複数の専攻に所属する「二重学籍」の多さが指摘されている (e.g., 北村, 2012 ; Sothy, Madhur, and Rethy (eds.), 2015)。しかし、二重学籍の存在自体が指摘される一方、二重学籍の実態や効用等に関してはほとんど議論されていない。大学卒業等の高学歴取得者が望むような待遇を備えた雇用先が十分に整備されていないなか、大学において二つ以上の専攻にまで所属することは経済的には不合理にも見える。本研究では、高等教育を修了した人々に対する雇用先が不十分なカンボジアにおいて、大学に進学した多くの学生がさらに複数の専攻に所属するにはどのような要因があるのかに焦点を当てる。また、以上を通してカンボジアにおけるキャリア教育を向上させるための基礎資料を得ることをねらいとする。

大学進学行動に与える要因に関しては、日本においても上地 (2014) や内田 (2012) といったレビュー論文が複数刊行されるなど、今日までに多くの研究がなされている。進学行動は個人の利益を最大化させること目的とする行動として経済学的に説明されるのが代表的であるが、

期初教育等と比べて、高等教育は特に投資的な行動として述べられるものである。しかしながら、こうした簡明で汎用性の高い説明も、発展途上国における進学状況を議論するための説明としては不十分であることは小口 (2012) も指摘する通りである。小口は、その理由として次のように述べている。国際機関の介入による発展を遂げている発展途上国では、先進国の資本が安価な労働力を求めて拡大されているため、高賃金で雇用吸収力が高い産業は形成されにくい。そのため、カンボジアにおける高等教育機関への進学という投資行動は対価としての「よい仕事」を得られる見込みが少なく、人的資本論における経済的合理性という観点からのみでは説明され難いという (p. 43)。

カンボジアにおける二重学籍の意味するところとは、先行研究によると次のように説明されている。カンボジアの「学生は公立の大学と私立の大学の2つに同時に所属する場合もあれば、同じ大学の異なるシフトに在籍する場合もある」(Sothy, Madhur, and Rethy (eds.), 2015 : p.37)。日本においても「ダブル・スクール」は見られるが、大きく異なる点がある。日本においてしばしば見られるのは、大学に通いながら資格取得のために通う予備校等や、同様に資格取得等を目的として通信制の大学等に所属するもの、大学に通いながら同じ大学の他の部局に副専攻として所属するものがある。カンボジアにおいては、複数の学位プログラムに所属するが、多くの場合はその両方が主専攻である。また、その理由について北村 (2012) は具体例を挙げて説明を試み

ている。「例えば、一般的に大学としての社会的評価は国立大学の方が高いが、それらの国立大学の教育プログラムは伝統的な学問領域を主にカバーしており、職業に直結すると考えられる実践的な領域（経営管理やITなど）の教育にはそれほど力を入れていない。そのため、国立大学の学生たちが、私立大学でこれらの分野の学位を取得することによって、国立大学卒業という社会的評価と私立大学の実践的学位を同時に得ようとするケース」（p. 162）がしばしば見られるという。また、実態に関しては、北村は「少なく見積もっても四分の一程度、場合によっては半数近くの学生たちが、複数の学位プログラムに在籍しているようである」（p. 163）と推測している。また、国際交流基金（2015）も、カンボジアでは政府が奨励していることもあり二重学籍はよく知られたことのものだとしており、北村（2012）の見積もりは一定程度支持されていると考えられる。一方で、その割合には地域差が存在するとの指摘も梅野ほか（2013）などに指摘されている。

以上をふまえ、本報告ではカンボジアにおける二重学籍という進路選択行為の特徴を検討する。具体的には、カンボジアの首都であるプノンペン（Phnom Penh）と、プノンペンから北西に位置する地方都市であるバタンバン（Battambang）との二つの都市における二つの大学において学生に対するインタビュー調査とアンケート調査とを行ない、学生を取り巻く家庭や通学に関わる状況や、彼ら自身の就職活動に対する考え方等を検討する。こうした検討を通して、カンボジアにおいて経済的には一見不合理な二重学籍という選択が行なわれる仕組みやそれによる違い等を考察する。

また、本報告の狙いは、今後カンボジア全体に

一般化可能な枠組みで検討を行なうための仮説生成的な意味合いも持っている。カンボジアの高等教育に関する多くの調査・研究では、カンボジア全体に一般化可能な枠組みでデザインされた研究は少ない。統計的な手続きをとる研究では母集団を明示したうえで、ある現象の「多い」や「少ない」を議論すべきことは言うまでもないが、人的、金銭的リソースの制約もあり、多くの研究は首都であるプノンペンや国際空港のあるシェムリアップをフィールドとしている。そういう意味で、この「二重学籍」現象も実態が必ずしも正確に捉えられているとは言い切れないのも事実である。二重学籍現象は、高等教育修了者に見合った雇用先という意味では見返りの見込みが少ない投資であり、貴重な青年期が多忙さに追われて受動的なものに終わってしまうという可能性もある。そういった意味でも、カンボジア全体における二重学籍は実態を正確に捉えて早急に議論されるべき問題である。

本報告では、カンボジアにおける高等教育の位置付けを歴史的に概観した後、調査方法や調査地についてまとめたうえで調査結果を提示する。調査の主な部分はアンケートを用いて行っており、インタビューを用いて得られた情報は考察に加味する形で提示する。

2. 研究の背景：カンボジアにおける高等教育の制度と歴史

カンボジアにおける教育の制度は、いわゆる「6-3-3-4制」である。6歳から就学を開始し、初等教育6年間、前期中等教育を3年間、後期中等教育を3年間受け、4年制の大学に通う。また、TVETと呼ばれる職業訓練学校が存在し、専門的な技術を身に付ける機会が設けられているが、TVETの卒業生に対する雇用保障が無くなった

ことや、新興労働市場におけるニーズとそれまでの TVET でのプログラムとの関連性が低下したことにより、1990年代半ばには一般的な TVET 機関への入学者数が減少したとされる。既に述べたように高等教育修了者数は年々増加しているが、彼らは全体的に見るとまだまだ割合が少なく、カンボジア国内において貴重な人材になることは容易に推測することができる。しかしながら、彼らの受け口が十分に整備されていないため、就職後の苛酷さは増す一方である。また、大学では午前・午後・夜間・土日コースなど3から4部制がとられていることも多く、これが複数の大学や学部にも所属することを可能にしている側面もある。

次に、カンボジアにおける高等教育の歴史を概観する。カンボジアにおける近代高等教育の歴史は、多くの先行研究において次のように区分され、論じられているため、本研究でもある程度これに依拠して歴史を概観する。詳細は Pit and Ford (2004)を参照のこと。その時代区分は概ね次の通りである、

- 第1期：フランス保護下時代から1969年、
- 第2期：1970年から1979年のロン・ノル政権・ポル・ポト政権時代、
- 第3期：1979年から1989年のカンブチア人民共和国時代、
- 第4期：1990年代以降の復興・開発時代。

まずは第1期である。近代カンボジアにおける最初の大学が開校されたのはこの時期である。フランスの植民地支配が終わる数年前、1947年に開校されたとされる。その後、カンボジアの国際的評価向上をねらい高等教育の量的拡大が急速に進められた

その後、第2期においてカンボジアの高等教育は一度壊滅することとなる。戦争やクメール・

ルージュと呼ばれる大量虐殺により、大学生の9割以上が命を落とし、教師や知識人も殺害されたり国外に避難したりした。

第3期に樹立した親ベトナムのカンプチア人民共和国では、ソビエト・モデルによって高等教育機関が再建され、行政に携わる幹部候補生の育成が目指された。

その後、第4期の初めには国際機関の介入などもあり国家の市場経済への移行・高等教育の大衆化が進んでいったとされる。また、カンボジアは1999年に東南アジア諸国連合(ASEAN)に加盟したが、こうした国際機関との関わりでは、カンボジア人の教育水準が外国人の想定する水準にあることが求められ、外国人の専門家や国際機関の協力に依存して改革が行なわれることとなった。1990年代の末には一般のカンボジア人が平和を実感できるようになったとされるが、1997年に大学経営への民間資本の導入が認められるようになったのを皮切りに私立大学の数が急増することとなった。その結果、大学教育において質の低下が多方面で聞かれるようになった。たとえば、Kitamura, Umemiya, and Hiroshiro (2015)は、大学教育の質について、大学教員の教育活動と研究活動との観点から議論しているが、文系学部と理系学部といった部局による教育活動や研究活動の違いなども指摘されている。

以上のように、カンボジアにおける近年の高等教育は質を管理するシステムのないまま、もしくは質を犠牲にすることを厭わずに高等教育への就学率を上げてきたと考えられている。ここでの議論において、「教育の質」についてのコンセンサスが得られているとは言い難いものの、高等教育機関が曖昧な認可プロセスで乱立させられていることは事実のようである。また、以上のような状況下で設立された私立大学を受け皿

の一つとして行なわれる二重学籍が学生にどのような影響を与えるのかについて議論することは避けて通ることのできないものである。

3. 研究方法

3.1 調査概要

調査は2度にわたって行なわれた。第1回調査は2015年2月から3月にかけてバタンバン州における公立の総合大学(以下、BB)にて行なわれた。滞在期間9日間にて調査を実施し、調査協力者がアンケートについて気軽に質問することができるよう、対面してのアンケート調査を実施した。その際、カンボジア語と英語とを理解する通訳の協力を得て調査協力者とのコミュニケーションを図った。また、そのアンケートに対する回答をもとにして、一人あたり10分程度のインタビューを行なった。サンプリングに関しては、調査期間が当該大学の春休みに当たる期間であったため、大学側の助けを得て所属部に偏りが生じないように学生を招集した。第2回調査は、2015年12月に首都プノンペンにおける王立の総合大学(以下、PP)にて6日間の滞在期間にて行なわれた。第2回調査は当該大学の授業期間であったため、当該大学にて街頭調査の形で実施した。この調査においても、調査協力者が気軽に質問することができるよう、対面して実施し、さらにそれをもとにして数分間のインタビューを行なった。

サンプリングに関しては、積極的・消極的複数の理由からランダムサンプリングやそれに準ずる抽出法を利用しなかった。最も大きな理由は積極的なものであるが、本研究が探索的研究の性格の強いものであることである。調査はカンボジア語(クメール語)にて行なわれたが、アンケートの翻訳の際に研究者の意図するものにな

っているかを確認する必要がある。また、その上で必要に応じて訳語の修正を行なった。次に、消極的な理由としては金銭的なリソースの制約が挙げられる。上記の方法をランダムサンプリングにて行なう方法も考えられたが、本研究ではこの点の労力を最小限に留めることを優先した。また、大学の選択に関しても今後は私立も含めて拡大していく必要があるが、本研究では私立大学は除きパブリック・セクターの運営する大学のうち2校を取り上げた。PPは首都に位置するカンボジアで最も権威のある大学であり、BBは地方都市に位置する公立の大学である。なお、調査協力者はPPが55名、BBが31名、合わせて86名であった。

3.2 リサーチクエスチョンおよびデータ概要

本研究の目的は、高等教育を修了した人々に対する雇用先が不十分なカンボジアにおいて、どのような学生が2つ以上の専攻をもっており、そうした学生のキャリア意識や卒業後の希望進路にはどのような特徴があるのかを明らかにすることである。以上を明らかにするため、本研究では以下の5つのリサーチクエスチョン(RQ)を設定した。

RQ1: どのような学生が二重学籍をする傾向にあるのか

RQ1-1: どのような学部の学生に二重学籍が多いのか

RQ1-2: 二重学籍をする学生の家庭環境にはどのような特徴があるのか

RQ2: 通学理由は二重学籍の有無でどのように異なるか

RQ3: 二重学籍をする学生は就職活動についてどのように考える傾向があるのか

RQ4: キャリア意識は二重学籍の有無でどのよ

うに異なるか

RQ5: 卒業後の希望進路は二重学籍の有無によ
 ってどのように異なるか

データの分析には統計解析環境 R 3.2.3 および
 Microsoft Excel 2013 を用いた。また、本研究で用
 いた変数の記述統計は Appendix の通りである。

4. 結果

4.1 どのような学生が二重学籍をする傾向にあるのか

リサーチクエスチョンに沿って結果を提示す
 る。まずは、所属学部による二重学籍の割合であ
 る（以下、二重学籍をしている学生を MUE、し

ていない学生を non-MUE と表記する)。図 1 は
 調査協力者が所属する学部の内訳である。BB に
 おける調査協力者の中には主たる専攻が外国語
 学部でありながら二重学籍をしている学生は見
 られなかったが、最初に属した専攻を経営学/
 観光学部と答えた学生のうち 2 名が外国語学部
 にも所属していると答えた。2つの大学に共通し
 て言えることは、両大学ともにいわゆる理系学
 部に所属する学生の二重学籍割合はやや低い傾
 向にあることである。また、2つの大学において
 異なる点は、外国語系の学部にも所属する学生
 の傾向である。外国語系の学部にも所属する学
 生については、PP では MUE が多く、BB では non-
 MUE が多い傾向にあった。

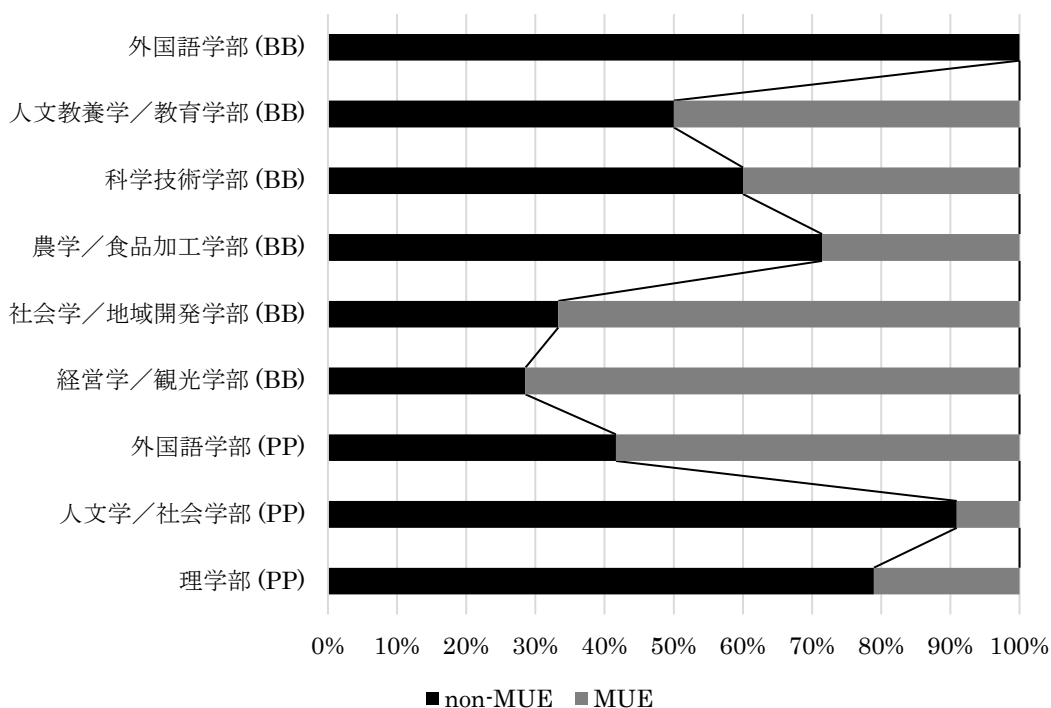


図 1 調査協力者の所属学部

次に示すのが、男女比率の差である（図 2）。図が示す通り男子学生の方が二重学籍をしている割合が高く、 χ^2 二乗検定の結果、両者の相違は 5%水準で有意で ($p = .038$)、中程度前後の効果を示した ($W = .253$)。これは、2 校を総合した値であるが、学校別でも比率は同様の傾向を示している。

次は、兄弟・姉妹を含むきょうだいの人数の違いである（図 3）。二重学籍は授業料等の家族の金銭的な負担が大きいため、きょうだいの人数が多ければたとえ入学しても継続が困難になることが予想される。分布を見ると、やはり MUE の方がきょうだいの人数がやや少ない傾向にあるものの、対応のない t 検定の結果有意差は検出されず、有意な効果量も検出されなかった。また、他の家庭環境を示す設問に関しても、本の所有冊数や文化資本の数に MUE がやや高い傾向を示したものの有意な違いは検出されなかった。

次に、両親の学歴の違いについて検討する（図 4、図 5）。設問は単一回答の多肢選択式で、次の

12 個の項目を用いた。「幼稚園 (kindergarten)」、「小学校 (primary school)」、「中学校 (lower secondary school)」、「高等学校 (higher secondary school)」、「大学 (university)」、「大学院・修士課程 (master course)」、「大学院・博士課程 (doctoral course)」、「二重学籍 (plural bachelors)」、「その他 (others)」、「知らない (don't know)」。

まず、図 4 に示すのが調査協力者の母親の最終学歴である。両者の相違が最も大きいものとしては、高卒者の割合である。つまり、二重学籍をしている学生の母親に高卒者が多く、していない学生の母親に少ない。一方、二重学籍をしていない学生の母親については小学校や中学校卒業者の割合が高い。他の校種については、多少の相違はあるものの大きな違いとは言えないものである。全体としては MUE の母親の方がやや高学歴である傾向があると言える。

図 5 は、調査協力者の父親の最終学歴である。最も大きな相違は、大学院・修士課程修了者の割

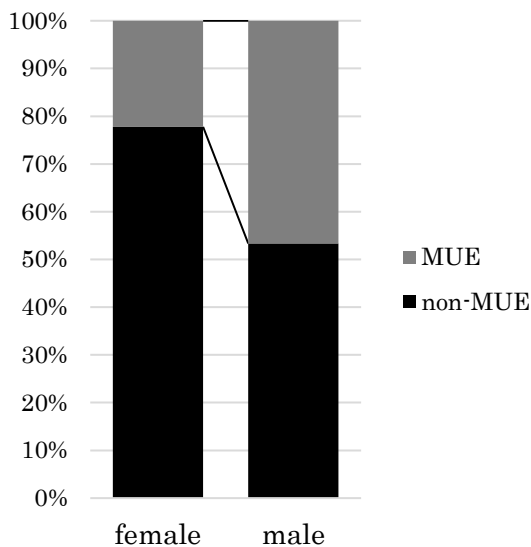


図 2 二重学籍の男女比

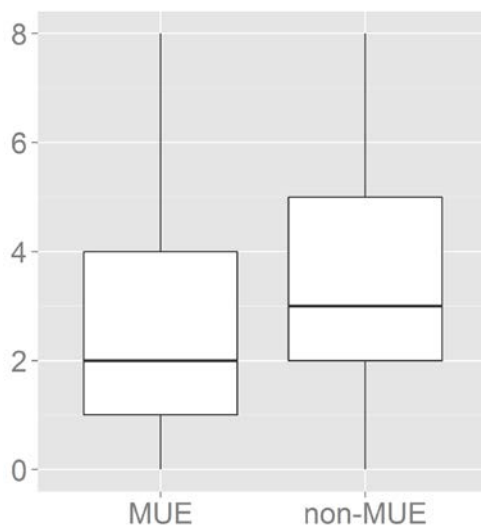


図 3 きょうだいの人数の相違

合である。MUE が全校種中最も高い 30.8%であつたのに対し、non-MUE では 1 人も存在しない。Non-MUE の方が人数が多いことを考えるとこれは意味ある相違である可能性が高いと言え

るだろう。一方で、non-MUE が高い割合を示すのは母親同様に小学校や中学校が最終学歴の父親である。

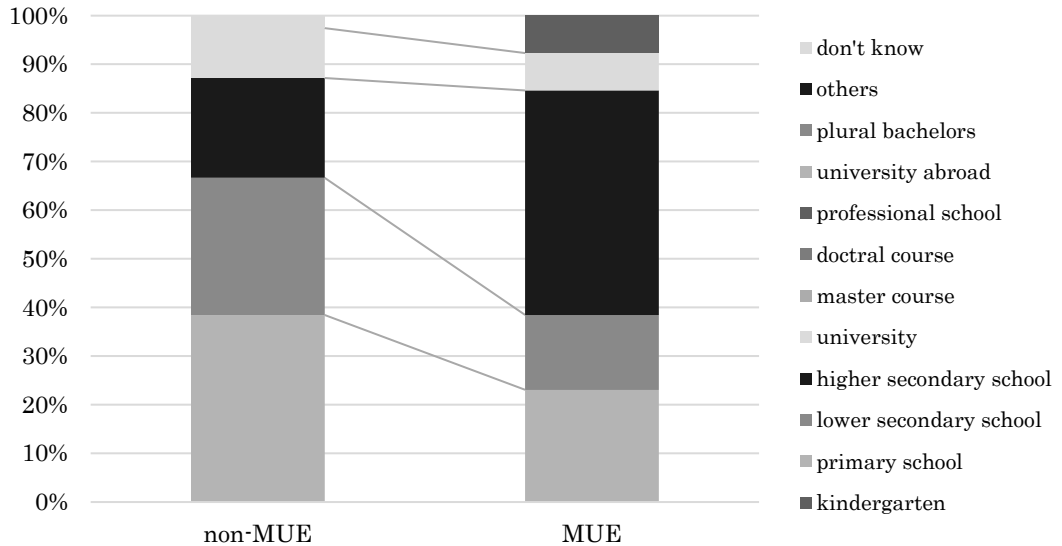


図 4 調査協力者の母親の最終学歴

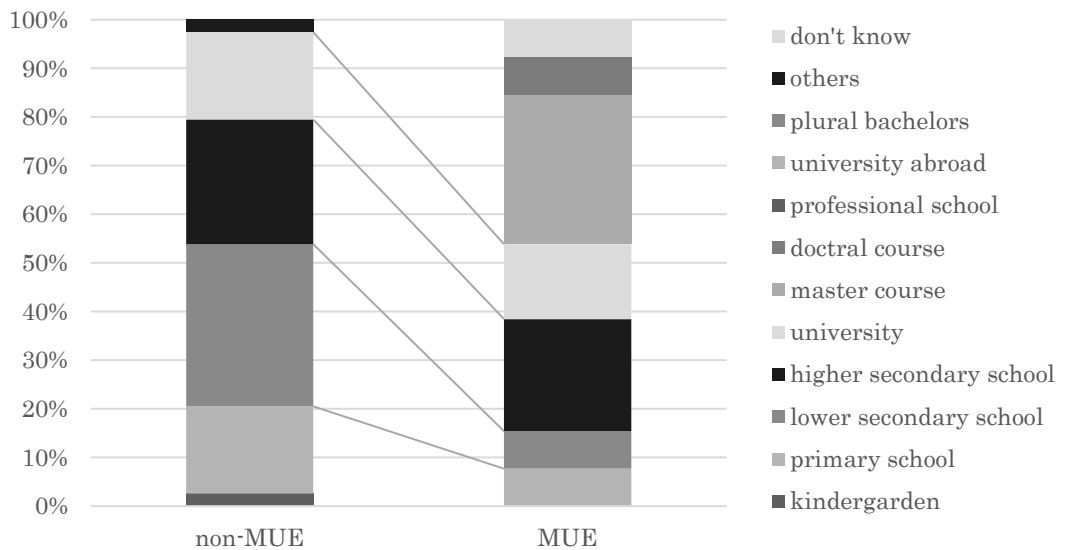


図 5 調査協力者の父親の最終学歴

4.3 二重学籍をする学生は就職活動についてどのように考える傾向があるのか

次に、就職活動についてどのような考えを持っている学生が二重学籍をする傾向があるのかを示す(図6、表1)。就職活動に関する設問は、先行研究をもとにモデル1に示す9つを設定した。なお、TVETとは先述の通り職業訓練学校のことであり、STEMとは、カンボジア政府がカンボジアの技術向上を図るために推進しているもの(Science, Technology, Engineering, and Math:STEM)である。これまでの節では、専攻による違いや親の学歴による違い等が検出されたが、図6では「家族がすすめる」の数値の差異に着目したい。つまり、親の学歴が高いことや家族が積極的に進路に意見を述べるのが二重学籍をする傾向を高める要因であることが示唆される。しかしながら、家族の意向がどれほど強くても本当に進学するかどうかは本人に意思に左右されると考えられる。本人の通学理由が同じであると仮定した場合、家族の意向によって二重学籍をする確率が変わるのかをロジスティック回帰分析で検討する。

ロジスティック回帰分析の結果が表1である。2つのモデルは二重学籍の有無を予測するものである。それぞれの変数について、他の変数の数値が同じであった場合にどれだけ二重学籍の確率を高めるのかを検討することができる。モデル1が就職に関する変数を全て含んだモデル、モデル2は「家族が積極的に進路に口出しをする」と「就職には出身学部が重要である」との交互作用項を加えたものである。これにより、「家族が積極的に進路に口出しをする」の数値の相違によって「就職には出身学部が重要である」の効果がどれほど変動するかを検討することができる。

2つのモデルを比較したところ、AICや正解率

を重視しモデル1を採用することとした。モデル2においては、擬似決定係数等はモデル1に比べて改善しているものの、AICが高く、交互作用項の係数にも有意傾向が見られなかったので採用しないこととした。以下、モデル1の分析結果を提示する。

まず、モデル1に関して有意傾向が確認された係数は表1の通り「自分の専門分野を活かせる職へのこだわり」、「TVETに対する雇用保障の撤廃を知っている」、「家族が積極的に進路に口出しをする」、「就職には出身大学が重要である」、「就職には出身学部が重要である」の5つであった。これらの設問のうち、「自分の専門分野を活かせる職へのこだわり」、「就職には出身大学が重要である」2二つの設問に関しては、係数が負であり、二重学籍をする確率を下げるものであることが示唆される。また、二重学籍をする確率のオッズがそれぞれ何倍であるかを示したのが図7である。実線が正の効果を示し、破線が負の効果を示すものである。他の変数を統制してもなお「家族が積極的に進路に口出しをする」が二重学籍に正の効果を持っている。つまり、進路選択について家族が積極的なことや学生自身がこだわりを持っていないことが二重学籍の要因として浮上した。また、それを統制したうえで、出身学部の効果が最も大きなものであった。「就職には出身大学が重要である」の係数が負であることを考え合わせると、どの大学かではなくどの学部かが重要であると考えている学生が二重学籍をする傾向が強いことが示唆される。ただし、調査の対象はともに権威があるとされる大学であるため、この点に関しては調査対象を変更/拡大して検討する必要がある。

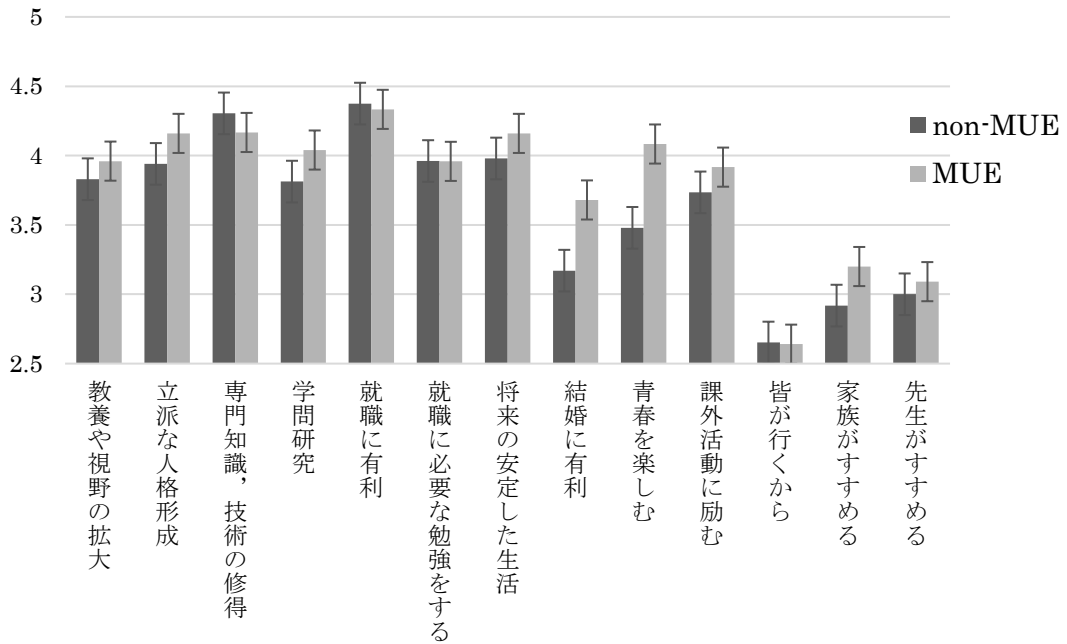


図 6 通学理由

表 1 二重学籍の有無を説明する変数

	モデル 1	モデル 2
(切片)	-2.302 (2.18)	-7.87 (6.665)
自分の専門分野を活かせる職へのこだわり	-0.802 (0.477)*	-0.738 (0.492)
STEM が推進されていることを知っている	0.014 (0.263)	0.037 (0.264)
TVET に対する雇用保障の撤廃を知っている	0.645 (0.298)**	0.624 (0.3)*
入学前にこの大学のカリキュラムを見た	-0.38 (0.296)	-0.397 (0.3)
家族が積極的に進路に口出しをする	0.619 (0.332)*	2.142 (1.719)
大学生活の満足度	0.405 (0.394)	0.378 (0.392)
就職には若さが重要である	-0.287 (0.444)	-0.3 (0.441)
就職には出身大学が重要である	-0.748 (0.444)*	-0.706 (0.444)
就職には出身学部が重要である	1.197 (0.57)**	2.432 (1.5)
家族が積極的に進路に口出しをする× 就職には出身学部が重要である		-0.352 (0.381)
擬似 R^2	0.271	0.284
正解率	75.6	74.4
Deviance	81.061	80.137
AIC	101.061	102.137
-2 対数尤度	-40.53	-40.069
観測数	78	78
観測数	78	78

注 数値：ロジスティック回帰係数（カッコ内：標準誤差）。 ** $p < 0.05$, * $p < 0.1$

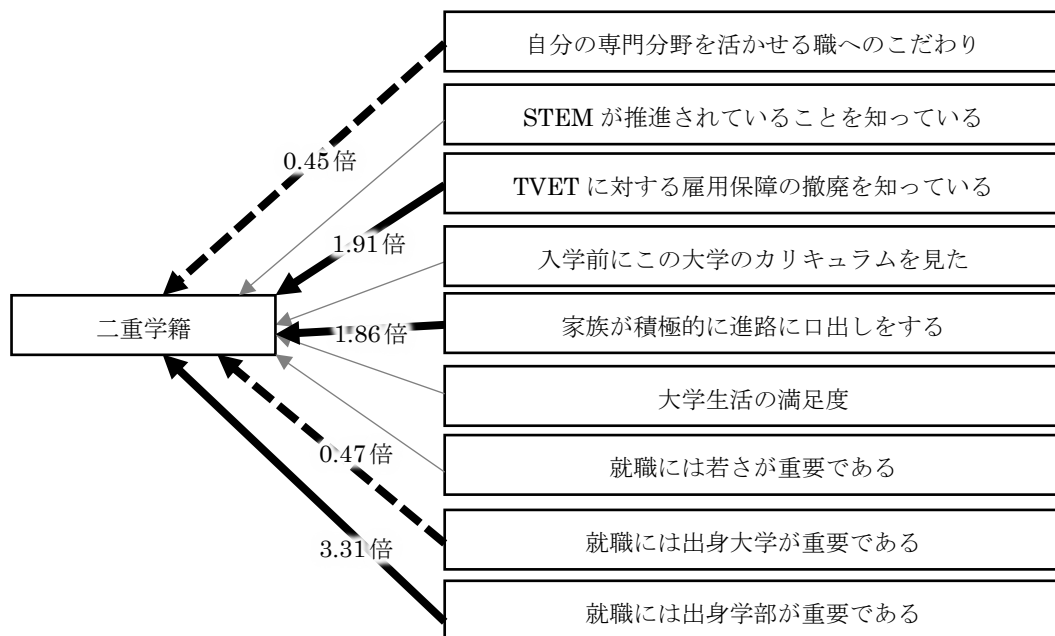


図 7 二重学籍を説明する変数

4.4 キャリア意識は二重学籍の有無でどのように異なるか

次に、キャリア意識関連の設問が二重学籍の有無によってどのように異なるのかを示す。小野ほか(2008)の尺度をもとに確認的因子分析を行なったが因子構造は再現されなかったため、ここでは、参考までにそれぞれの設問に関する平均値を小野(2008)の因子ごとに確認する。詳しい設問については Appendix に記載した。「①選択」については、MUE は概ね高いので、より良い職業選択をする能力があることが示唆される。ただし、「②対処」のうちの主要なものは平均値が低く、失業や留年に対する対処に対する自信が低いことが示唆される。また、「③準備」に関しては、MUE は日常的に就職の準備を心がけているものの計画的ではないとの自覚がある

ようである。「④情報」に関して、MUE は多忙のためか、情報収集に関する意識が低い傾向にある。「⑤資格」については、専門的な職業に就くための準備に関して non-MUE の方が高い傾向を示している(図 8)。

4.5 卒業後の希望進路は二重学籍の有無によってどのように異なるか

最後に、卒業後の希望進路に関する設問の結果を示す(図 9)。この設問では、先行研究をもとに、それぞれの選択肢に対する気持ちの強さを 5 段階で尋ねた。平均値に最も大きな相違が見られたのは、「留学」である。MUE は卒業後に就職を目指すのではなく、留学や大学院等を希望する傾向が強いことが明らかになった。一方で、non-MUE は「公務員」や「就職」に対する

気持ちがやや強い傾向にあり、卒業後すぐに就職する可能性が MUE よりも高いことが示唆された。また、「起業」に関しては、BB では non-MUE が高かったが PP では MUE が高かった

路にはどのような特徴があるのかを検討した。ここでは、調査結果の要点をまとめたうえで考察を加える。

先行研究でカンボジアの大学における二重学籍の多さが指摘されていたが、それに加え、本研究で新たに着目したのは二重学籍をする特徴、二重学籍の有無による就職に対する意識の違い等であった。MUE の特徴 (RQ1) としては、2つの大学によって差はあるもののいわゆる文系

5. まとめと考察

本研究では、カンボジアの 2 つの総合大学においてどのような学生が 2 つ以上の専攻をもち、そうした学生のキャリア意識や卒業後の希望進

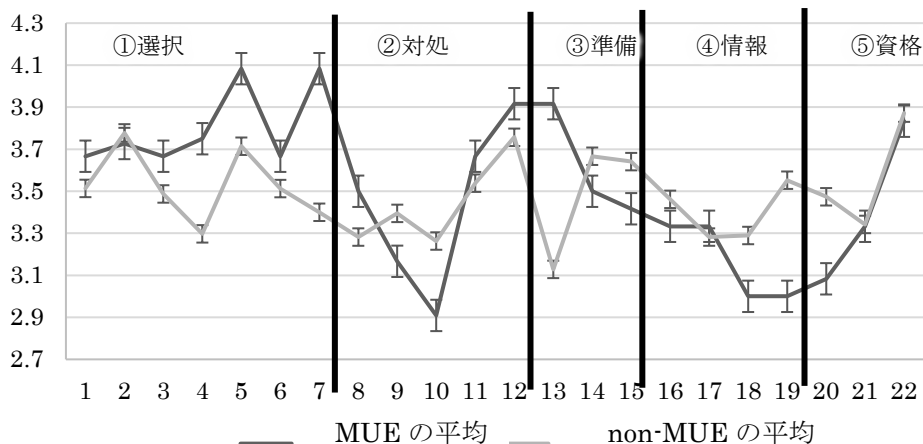


図 8 キャリア意識関連の設問の平均値

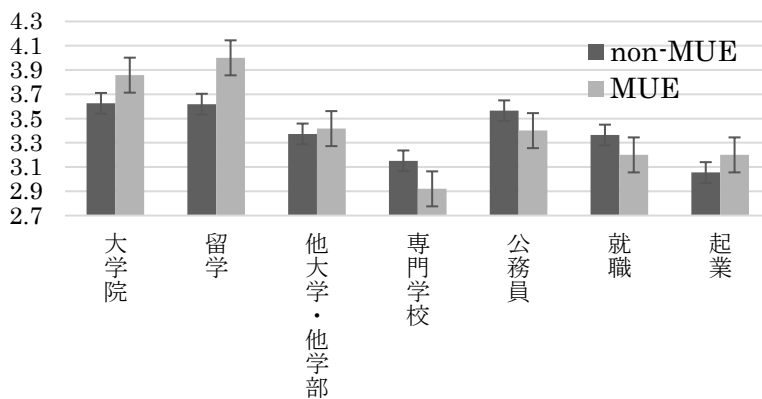


図 9 卒業後の希望進路

学部が多く (RQ1-1)、インタビュー調査の結果から、所属先としては外国語やビジネス関連の「実用」志向が強いと思われるものが多かった。性別としては男子学生が多い傾向があった。家庭環境としては、MUE はきょうだい的人数がやや少ない傾向や両親の最終学歴がやや高い傾向があった (RQ1-2)。通学理由 (RQ2) に関しては、MUE は「青春を楽しむ」、「結婚に有利」、「家族がすすめる」の設問における得点が高く、職については non-MUE と同等かむしろ低い結果となった。MUE が必ずしも主体的に専門的知識を深めたり広げたりしているわけではない傾向が示唆された。就職 (RQ3) に関しては、出身学部が重要であるという認識が働いているものの、やはり MUE は専門分野へのこだわりが小さいことや、家族の積極的な干渉が二重学籍をする学生の傾向として浮上した。キャリア意識 (RQ4) については、MUE は困難を対処する自信が少なく、就職のための情報収集や資格取得に対する意識も non-MUE に比べて低い傾向にあることが分かった。卒業後の希望進路 (RQ5) については、MUE は大学院進学や海外留学といった項目において得点が高く、公務員や就職などの就職に関する項目については non-MUE を下回った。

以上より、二重学籍が必ずしも就職に対して積極的な学生に見られるものではなく、高学歴で、かつ場合によっては経済的にも豊かな親のもとで、職に対してあまりこだわりを持たない学生に見られる現象である可能性が指摘できる。また、MUE は海外留学や大学院進学を希望する傾向がやや強いが、二重学籍はそれらとは違った問題を孕んでいると考えられる。本研究で行なったインタビュー調査でも、二重学籍をしている学生がかなり多忙を強いられているという

状況が見られたが、同時に 2 つの学位プログラムを専攻しても、多忙さのあまり深く幅広い学びが行われているとは言えない場合も少なくないと思われる。高い学歴を備え、専門分野を牽引していくことが期待されるカンボジアの大学生にとって、二重学籍という柔軟なカリキュラムが青年期の学びをより高度化するものであるために、今後さらなる議論が必要になることは言うまでもないだろう。

また、二重学籍は、文系学部のうち外国語やビジネス関連の学部を含むものである場合が多いと考えられる。カンボジアの観光地に限った研究であるが、外国語力が収入や就業機会を上げるとする研究 (e.g., Lwin and Morrow, 2013) もあり、この結果は一定程度は合理的なものとも考えられる。しかしながら、MUE は将来の確固としたキャリア意識を持ってなされたものではない場合もあり、失業に至ってしまうという可能性も孕んでいる。Hemelt (2009) が二重学籍と収入との関係について言及しているが、カンボジアの二重学籍については、それに見合った職が十分に開かれていないという点などからやや経済的合理性に欠けるものであり、キャリア教育の点からも今後の議論が重要なテーマである。収入という意味では、貧困からの脱却という可能性を子どもに託した親の存在が連想されるが、二重学籍と失業や収入の関係について今後さらなる研究を行ない、自由で豊かな学びができるはずの人生において非常に大切な時間をどのようにして有意義なものにするか、注意や議論を喚起していきたい。

引用文献

Basit, Z. (2011). Double Majors - One for Me, One for the Parents. *Economic Inquiry*. 50(2), 287-308.

- Hemelt, W.S. (2009). The college double major and subsequent earnings. *Education Economics*. 18(2), 167-189.
- 上地 香杜. (2014). 「大学進学行動の要因に関する先行研究レビュー：地域的な要因に着目して」名古屋大学大学院教育発達科学研究科 教育科学専攻『教育論叢』第 57 号、 23-32.
- 北村友人・杉村美紀編. (2012). 『激動するアジアの大学改革：グローバル人材を育成するために』上智大学出版.
- Kitamura, Y., Naoki, U., & Hirosato, Y. (2015). Quality of Education and Research in Cambodian Higher Education Institutions. In Kitamura, Y., D. Brent Edwards., James H. Williams., & Chhinh Sitha. *The Political Economy of Schooling in Cambodia: Issues of Quality and Equity (International and Development Education)*, 205-220
- 小口 瑛子. (2012). 「農業から転換しつつある社会における「上昇志向」の発達：カンボジア・シエムリアップ州都近郊農村における大学進学の見好」東京大学大学院総合文化研究科国際社会科学専攻『相関社会科学』第 22 号、43-63.
- 国際交流基金. (2015). 「世界の日本語教育の現場から (国際交流基金日本語専門家レポート) 進めば自分の 夢が叶うよ：学生の短歌から」 (https://www.jpf.go.jp/j/project/japanese/teach/dispatch/voice/voice/tounan_asia/cambodia/2014/report02.html)
- Lwin Maung Maung. & Morrow Jeffrey. (2013). Generation of Employment and Income through English (The Case of Tourist Industry in Siem Reap,Cambodia). *Journal of Economics*, Kumamoto Gakuen University, 19(1), 99-137.
- Millot, Benoît., & Sideth, Sam. (2014). *Kingdom of Cambodia: Higher Education Assessment*. Asian Development Bank.
- 小野淳・斎藤富由起・社浦竜太. (2008). 「四年制大学におけるキャリアエフィカシー尺度開発の試み：ダブルスクール現象に着目して」『千里金蘭大学紀要』5、49-59.
- Pit, Chamnan and David, Ford. (2004). "Cambodian higher education: mixed visions," in Altbach, Philip G and Toru Umakoshi (eds.) *Asian Universities: Historical Perspectives and Contemporary Challenges*, Baltimore, Md.: Johns Hopkins University Press. 333-362. =(2006) 羽谷沙織 (訳) 「カンボジアの高等教育——交錯する展望」北村友人 (監訳) 『高等教育シリーズ 137 アジアの高等教育』玉川大学出版部、364-400.
- Sothy, K., Madhur, S., and Rethy, R. (eds.) (2015). *Cambodia Education 2015: Employment and Empowerment*. Phnom Penh: Cambodia Development Resource Institute.
- 内田 康弘. (2012). 「大学進学行動に関する先行研究のレビュー：経済学の諸理論に着目して」名古屋大学大学院教育発達科学研究科 教育科学専攻『教育論叢』第.55 号、3-14.

謝辞

本研究の一部は、東京大学大学院教育学研究科学校教育高度化センターの院生プロジェクトの助成を受けて行なったものである。また、データの大部分は東京大学大学院教育学研究科・北村友人准教授とそのゼミに所属していた学生と共に収集したものである。

Appendix

変数	<i>M</i>	<i>SD</i>	尖度	歪度	最小	最大	<i>n</i>
きょうだい的人数	3.23	2.06	0.09	0.83	0	8	77
通学理由							
教養や視野の拡大 (C1_2_1)	3.89	1.04	0.19	-0.83	1	5	74
立派な人格形成 (C1_2_2)	4.01	1.00	-0.62	-0.68	2	5	76
専門知識, 技術の修得 (C1_2_3)	4.27	0.83	0.51	-1.01	2	5	71
学問研究 (C1_2_4)	3.91	0.89	-0.38	-0.52	2	5	74
就職に有利 (C1_2_5)	4.37	0.79	1.46	-1.29	2	5	73
就職に必要な勉強をする (C1_2_6)	3.97	1.15	0.75	-1.13	1	5	77
将来の安定した生活 (C1_2_7)	4.05	1.06	0.63	-1.11	1	5	74
結婚に有利 (C1_2_8)	3.37	1.30	-0.80	-0.41	1	5	73
青春を楽しむ (C1_2_9)	3.66	1.22	-0.16	-0.67	1	5	74
課外活動に励む (C1_2_10)	3.81	1.05	0.40	-0.84	1	5	75
皆が行くから (C1_2_11)	2.65	1.35	-1.12	0.21	1	5	72
家族がすすめる (C1_2_12)	3.01	1.36	-1.12	-0.19	1	5	74
先生がすすめる (C1_2_13)	3.03	1.32	-1.16	-0.20	1	5	72
就職							
自分の専門分野を活かせる職へのこだわり (D1)	3.94	0.77	-0.88	-0.06	2	5	84
STEM が推進されていることを知っている (D5)	2.44	1.26	-1.24	0.26	1	5	82
TVET に対する雇用保障の撤廃を知っている (D7)	1.99	1.14	-0.06	0.90	1	5	82
入学前にこの大学のカリキュラムを見た (D8)	3.33	1.18	-0.38	-0.49	1	5	82
家族が積極的に進路に口出しをする (D9)	3.57	1.04	0.10	-0.67	1	5	82
大学生活の満足度 (D10)	3.95	0.87	0.38	-0.59	1	5	83
就職には若さが重要である (D11)	4.12	0.77	-0.18	-0.54	2	5	83
就職には出身大学が重要である (D12)	4.17	0.88	-0.24	-0.78	2	5	83
就職には出身学部が重要である (D13)	4.13	0.85	-0.83	-0.50	2	5	83
キャリア意識							
自分の趣味・能力に合うと思われる職業を選ぶこと (B8_1)	3.58	1.01	-0.41	-0.41	1	5	50
自分の理想の仕事を思い浮かべること (B8_2)	3.77	0.83	-0.09	-0.47	2	5	48
自分の才能を、最も活かせると思う職業的分野を決めること (B8_3)	3.54	0.92	0.02	-0.20	1	5	52
自分の望むライフスタイルに合った職業を探すこと (B8_4)	3.33	1.08	-0.66	-0.12	1	5	52
将来どのような生活をしたいか、はっきりさせること (B8_5)	3.65	0.88	-0.63	-0.13	2	5	52
自分の将来設計にあった職業を探すこと (B8_6)	3.44	1.13	-0.76	-0.24	1	5	50
自分が従事したい職業の仕事内容を知ること (B8_7)	3.83	0.97	0.44	-0.80	1	5	48

もし望んでいた職業に就けなかった場合、それにうまく対処すること (B8_8)	3.56	1.11	-0.56	-0.37	1	5	52
望んでいた職業が、自分の考えていたものと異なっていた場合、もう一度検討し直すこと (B8_9)	3.56	0.90	0.29	-0.29	1	5	48
何かの理由で卒業を延期しなければならなくなった場合、それに対処すること (B8_10)	3.33	1.00	0.15	-0.35	1	5	52
就職時の面接でうまく対処すること (B8_11)	3.29	0.96	-0.49	-0.06	1	5	52
欲求不満を感じても、自分の勉強または仕事の成就まで粘り続けること (B8_12)	3.45	1.10	-0.66	-0.43	1	5	51
就職への準備を生活の中で重視している (B8_13)	3.31	1.22	-0.85	-0.16	1	5	51
将来のために、在学中にやっておくべきことの計画を立てること (B8_14)	3.20	1.03	-0.56	-0.07	1	5	50
5年先の目標を設定し、それに従って計画を立てること (B8_15)	3.56	1.02	0.00	-0.39	1	5	52
自分の職業選択に必要な情報を得るために、新聞・テレビなどのマスメディアを利用すること (B8_16)	3.82	0.85	-1.19	0.15	2	5	50
今年の雇用傾向について、ある程度の見通しを持つこと (B8_17)	3.60	1.05	-0.20	-0.37	1	5	52
社会で起きている出来事について自分なりに調べている (B8_18)	3.46	1.00	-0.99	0.17	2	5	52
学校の就職係や職業安定所を探し、利用すること (B8_19)	3.22	1.04	-0.82	0.11	1	5	50
専門職に着くために資格試験の準備をしている (B8_20)	3.37	1.00	0.30	-0.45	1	5	51
卒業後さらに、大学、大学院や専門学校に行くことが必要なかどうか決定すること (B8_21)	3.31	0.97	-0.17	-0.41	1	5	51
本当に好きな職業に進むために、両親と話し合いをすること (B8_22)	3.88	0.96	-0.98	-0.31	2	5	52
卒業後の進路							
大学院 (D16_2_1)	3.70	1.13	0.00	-0.76	1	5	69
留学 (D16_2_2)	3.76	1.14	-0.46	-0.63	1	5	82
他大学・他学部 (D16_2_3)	3.41	1.20	-0.56	-0.46	1	5	76
専門学校 (D16_2_4)	3.09	1.19	-0.78	-0.36	1	5	79
公務員 (D16_2_5)	3.53	1.30	-1.00	-0.41	1	5	81
就職 (D16_2_6)	3.31	1.19	-0.62	-0.40	1	5	81
起業 (D16_2_7)	3.12	1.39	-1.16	-0.17	1	5	81

Copyright © 2010-2016 Center for Excellence in School Education,
Graduate School of Education, The University of Tokyo

東京大学大学院教育学研究科附属 学校教育高度化センター
Center for Excellence in School Education,
Graduate School of Education , The University of Tokyo

WEBSITE (日本語): <http://www.schoolexcellence.p.u-tokyo.ac.jp/>

WEBSITE (English): <http://www.schoolexcellence.p.u-tokyo.ac.jp/en/>